

池内 紀 (ドイツ文学者)

この半年たらずに親しかった女性を二人亡くした。一人は建築家、もう一人はマスコミの現場にいて、ともに地味だが、いい仕事をしていた。いつのまにか病が進行していた。気がついたとき、医学はほとんど、なすすべを知らなかった。二人とも延命を拒み、死と和解したかのようにこの世



## 誠実な医学者の言葉

分の死と向き合っている人でもやはり、医者が死を回避させてくれることを期待するからだ。しかしそれは「無駄なことだ」とヴァイツェッカーはつづけている。「死との協定こそが医者

の任務なのだから」  
 終わりちかくに語られている。それまで二十三講の臨床講義をして、序論にはじまり四章にわたって、医者を志す人への入念な「人間学」の手引きをした。そののちの言葉である。長らく病理学の現場にいて、かぞえきれないほどなすすべを知らない状況に立ち会ってきた。だからこそ、その言葉は誠実で、意味深い。医者の卵に向かって語りかけた本だが、医者だけにゆだねるのはモッタイない。

からあざやかに旅立った。残された者は死と和解していない。病を了解してもしない。医者を問いつめ、糾弾したいくらいのものだ。「医学をさらに死への援助者でもあるなどと言うと、もちろん逆説的に聞こえるだろう」

『病いと人』

V・ヴァイツェッカー  
 (新曜社)

いけうち・おさむ 日本  
 の森をめぐる仕事と、カフ  
 カの個人全訳。ヒマなよう  
 でけっこう忙しい。

ドイツ人医学者ヴァイツ  
 ゼッカーが述べている。自